

本当に住んで幸せな街

視点を变えて静岡の魅力を考える

生活関連サービス部会では9月5日、静岡商工会議所会館で第8回ふれあいフォーラム「本当に住んで幸せな街」を開催しました。

講演を聞かせていただき、自分のもっている「ものさし」のスケール的小ささを感じさせられました。街並みを眺めて「この街には、こういう色がある。こんな風を感じる」という感覚をいつのまにか無くして、画一的なものに慣らされていたことに気づきました。自分のもっている「感覚のものさし」が、どれだけあるか、つくれるかというところに、キーがある気がします。そして「あれもいい」「これもいい」と多様性を認めることで、街は面白くなつていきます。

用宗は今、変わろうとしています。小島さんが皆様に投げかけている用宗に、まずは足を運びましょう。



生活関連サービス部会
部会長
田中康隆

〈講演1〉

センシユアシティ(官能都市)としての静岡市の魅力、可能性を考える



株式会社LIFULL
LIFULL HOME'S総研
所長
島原万丈さん

ル・コルビュジェが考えた「輝く都市」「垂直田園都市」

センシユアスとは五感のこと。都市の魅力を測る新しいものさしとして、五感で都市を見ることを提案しました。皆様は「静岡は良いところ」と思っている。なぜそうなのかを数字でお見せできればと思います。

新しいものさしを提案する背景には、都市が均質化しているという問題意識があります。Googleで「再開発」の画像を検索すると、高層ビルの画像が出てきます。日本全体が同じパターンです。国土交通省が「都市再開発実務ハンドブック」で示している再開発のフォーマットがそうなっているからです。このフォーマットを考え出したのは、

ル・コルビュジェです。1922年に「300万人の現代都市」として発表したイメージは、広くてまっすぐな道路と広い公園があつて、その中に超高層の建物が並んでいる。空気がいっぱいあつて、光が射し込むから「輝く都市」、緑豊かな田園都市に垂直に積み上げた住宅があるから「垂直田園都市」とも呼んでいます。

ル・コルビュジェは1925年に「ヴォアザン計画」というパリの再開発計画を提案します。ヴォアザンはフランスの自動車メーカーの名前で、クルマを効率よく走らせるための街を考えました。道路を広くまっすぐにして、交差点で何度も停まらなくていいようにひとつの街区を400m以上に大きくして、業務地区と住宅地区を分けて、道路でつ

ないでいます。ル・コルビュジェの都市計画は、ニューヨーク「スタイブサントタウン」、セントルイス「ブルーイットアイゴー」、大阪「千里ニュータウン」など世界各地で現実化しました。

都市再開発によって均質化した街は、つまらない

こうした都市計画に対する考え方を方向転換させたのは、ジェイン・ジェイコブズが1961年に出版した「アメリカ大都市の死と生」です。ジェイコブズは「都市にはきわめて複雑なからみ合うた粒度の近い多様な用途が必要で、しかもその用途が、経済的にも、社会的にも、お互い絶え間なく支えあつていることが必要だ」と業務地区と住宅地区に用途を分ける都市計画を批判しました。

「ブルーイットアイゴー」は1972年に壊されました。イギリスでは、サッチャー首相が就任すると、荒廃していた郊外の巨大団地を中低層の集合住